

教系の通世文献の学術的出版・研究が少し現時において、本書の出現は大いに歓迎すべく、これを推奨するに躊躇しな

る。  
(Vasudevāstrama Yaidharnaprakāśa. A treatise on World Renunciation. Critically edited with introduction, annotated translation and appendices. Publications of the De Nobili Research Library, ed. by G. Oberhammer, Vol., iii. 2 pts., Vienna 1976, 1978.)

イブネ・ムハムマド著

ジョン・オケイン訳

### スレイマーンの船

北川 誠 一

一

ペルシャ文学の十九世紀は紀行文の時代であった。外国旅行記に限ってまたその中にシールザー・サレフ・シラーミーザ Mirza Sa'ib Shirāzi の『旅行記 Safar-Nama』、サイヌルアブドヤーン Hajj Zain al-'Ābidin Shirvāni の数編の浩瀚な旅行記、シールザー・フサーン Mirza Husain じ

よって記されたファルフ・ハーン Farrukh Khan Amin al-Mulk の英仏滞在録、三度にわたるヨーロッパ旅行を行ったナースイルマディーナ・シャー Nasir al-Din Shah (在位一八四八—一八六六年)の旅行記等々の名を挙げるべきである。立憲革命期にシールザー・ハビーブ Mirza Habib Isfahāni のペルシア語訳であるモリエール James Morier の『イスマン・ハン・ハン』の冒険 “The adventure of Hajji Baba of Isfahan”、サイヌルアブドヤーン Zain al-'Ābidin Marāghai の『インラビーム・バダ』の旅行記 “Siyahat-Nama-i-Ibrahim Bāg” 等の旅行記に仮託した小説が読まれたのも前の時代に紀行文が盛んになってきたからである。

ところで、紀行文は十九世紀に突然おこったのではなく、これに先だつて数世紀の間にくっつかの勝れた旅行記が書かれている。サファヴィー朝の皇帝シャー・スレイマーン・サフィー Shāh Sulaimān Safī (在位一六六六—一六九四年)が、タイ・アヌタヤ朝のプラナライ Phra Narai 王 (在位一六五七—一八八年)のもとに遣した使節団の書記イブネ・ムハムマド Ibn-i-Muhammad Ibrahim Muhammad Rabi' の記した『スレイマーンの船』“Safnā-i-Sulaimāni” などその一である。

一六八二年サファヴィー朝の宮廷にアヌタヤ在位のイラン

人商人ハージー・サリム Haji Salim を長とするタイ使節団が到着した。<sup>(1)</sup> シャーは、この使節の求めに応じて返礼使フサイン・ムハムマド・ベグ Husain Muhammad Beg をアナタヤに派遣したのである。この希有な旅行記の存在は最近まで知られず、リュー、ストーリーイ等のカタログにはその名を見出すことができない。オケインは、大英博物館所蔵写本によってこの記録の英訳を出版したが、拙稿はこの訳文による内容紹介である。

本書の全体は、序章、"Jachir" (玉石) と称される四部分よりなる見聞録、および付篇より構成される。先ず一行の人員と旅程に言及し、次に見聞記の内容を紹介しよう。

## 二

使節団が乗り込んだ英国船は、一六八五年六月二十七日ペルシャ湾を望むバンドル・アッバース港を出帆した。総勢は正使フサイン・ムハムマド・ベグ以下、ムーサー・ベグ・ピールザード Musa Beg Pirzada 他一名の近衛士官 (Qurrah) 二名の近侍 (Gulam) 各々一名の近衛銃士 (Tufangchi) と近衛砲兵 (Tupcha) に著者を加えた八名、および途中病死して本文中に地位氏名の見えない数名と案内者ハージー・サリムである。船は二週間後マスカット港に着き、ここよりインド洋に乗り出し、四十七日間の航海後九月三日英国東イン

ド会社の租借地マドラスのチナバタンに入港した。同月十六日ここを出港テナセリム Tenasserim (Tausatru) に向い (part D) ベンガル湾を横断して現在ビルマ領のメルグイ Meigui に到着した。タイの地方官吏が乗船して必要な手続を済ませた後、一行は上陸してこの地方のイラン人太守ムハムマド・サーデク Muhammad Sadiq の息子の接待を受けた。彼等はメルグイよりボートでテナセリムに向ったが、ここで王使フサイン・ベグが病死した。高原の帝都イスファハンとバンドル・アッバースとの著しい気候差のためイラン出国前に既に数名の随員が死亡し、更に長い航海の途中数名が死亡していた。

一行はここより首都アナタヤに向ったが、テナセリムよりジャラング Jalong まではボートで二〇日行程、ここより象に乗ってシャム湾岸に出てバンコク西北西約一〇〇キロメートルのバジ・プリ Pai Puri (当時タイを訪れたヨーロッパ人の言うベチャプリすなわちタイ語のバジ・プリ Bai Puri) に至った。首都を訪れる外国人は、先ずこの長官に会見するのが通例であるが、一行が会った長官は同国人サイード・マザーザンダラーニー Sayyid Mazandarani であった。ここで再び船に乗ってメナム河を遡り、一旦アナタヤに行つてから当時王の滞在先であったロブプリに到着した。フサイン・ベグの死後空席であった正使後任の選任は王に委ねられた

が、近侍のイブラヒム・ベグが正使に昇格した。

プナライ王ハージール・サリーム派遣の際のイラン人宰相アーガーム・ハムマド・アスタラバーディー *Agā Muhammad Astarabadi* は既に失脚し、ギリシヤ人ファルコンが彼に替っていた。王のイラン人に対する不信が深まっていて、国書を直接王に手渡すことが拒否された。しかし王の不安は次第に鎮まった。拝謁式が無事終了すると一行は賓客として象狩、虎狩、酒宴、舟遊び等の宮中行事に時を過し帰国の時期を待った。

ところが一行は出発の時期を逸してしまったので帰路は往路と異つて全行程を船で行くことになった。王はイラン皇帝に国書を託し使節団全員に現金、布帛、榮服を下賜した (Part 3)。乗船確保が難しく、季節風の吹く間に出發が可能であるかが懸念されたが、ついにスーラト在任の (恐らくグジャラート人) 商人の老朽した持船に乗ることができた。船はパタニ、マラッカに寄港し、ペラク河口のダング・ダング沖を過ぎたあたりより西に向つてベンガル湾を横断し、タイ出發の三ヶ月後マラバル海岸のオランダ領コーチンにたどりついた。六ヶ月間風を待つてここを出港したが、船主はバンドール・アッパースに行くことを望まず、秘かにスーラトに向つた。マラータの領海でスィヴァージ (彼自身は既に一六八七年に死亡していた) の軍船に攻撃されたが、交戦して撃退

した。当時英国東インド会社はムガール帝国政府と紛争をおこし、アラビア海の港湾を封鎖中であつたので、スーラトに近づいた一行の乗船は捕獲された。会社側は使節一行を丁重に遇するとともに、バンドル・アッパースに送致を申し出、乗船をボンベイに連行した。ボンベイ出發は一六八八年四月八日、バンドル・アッパース入港は五月十四日であつた (Part 4)。

### 三

旅行記の随所に一行が通過した諸国で見聞した政情、地理、制度、風俗習慣、物産、動植物等について記されている。使節一行は往路第二の寄港地マドラスで、レセプションに招かれたが、イギリスの食物と食卓作法、信教等が細かく描写されている。出席していた英国婦人の天女のように美しいことに驚嘆したイブネ・ムハムマドは、ガザリーのごとき保守的思想家も彼女等を前にしては、彼女等がチャドルを被らず人前に顔を露わにしていることを非難し得ないであろうとの感慨を吐露している。

第三部はタイの、第四部はもっぱらタイ周辺のセイロン (pp. 168-174)・アチュー (pp. 174-181)・アンダマン (pp. 181-185)・ニコバル (pp. 185-187)・ルンン (pp. 186-188)・ペター (pp. 198-203)・日本 (pp. 188-198)・中国 (pp. 203-

216) の政体、住民、風俗、宗教、地理、物産等について記す。タイの国内事情については、宰相ファルコンの活動、王と貴頭の狩猟、官位官制、宗教と祭祀、司法、王の宮廷生活、国家財政、物産、食生活、ベグーとの戦争、一六八六年のマカッサル人の反乱等に及ぶ。

さて、イブネ・ムハムマドは、日本について「住民は陽気、勤勉であり、『下風地方』の習慣とは異って、日本人各々が何かしらの特定の職業に従事している。軍隊は王が農民から兵士を徴取するのであるが、職業的な軍人は他の人々から区別されている。日本ではどのような階級の者も衣服らしい衣服を着け、頭は剃っている。全般に彼等の日常生活は幸福で、娯楽と祭の会合に多くの時を費している」と述べる。既に十四世紀イルハン国の歴史家ラシードウッディーンは日本(Jinggu)の住民は「短軀で首が短く、胴が長い」と記しているが、本著者の記述は、自ら日本人に接し得たイラン人が描いた恐らく最初の日本人像であろう。ただし、イブネ・ムハムマドはタイにおける日本人の活動と日本人町については何一つ述べない。日本の特産物として貴金属、磁器、和紙を挙げ、特に日本刀には高い評価を与えている。

この旅行記が記された時より一世紀半早くポルトガル人トメ・ピレス(一四六六?—一五二四?年)はタイ各地に多数のアラブ人、ペルシャ人が住み、彼等は自治権を有して夫々

の首長に従っていたことを記しているが、イブネ・ムハムマドに拠るとプラナライ王の即位前アユタヤには三〇人程のイラン人が居住し、宮廷より住宅と官職を与えられていた。ところが、彼等はプラナライが政権奪取に成功したクーデター(一六五六年八月二十五日)に功績をたて、ギラーン地方出身のアブドルラザーク 'Abd al-Razzaq が宰相に任命された。間もなく彼が失脚すると替って、マーザンダラーン地方出身のアーガー・ムハムマド・アスタラーバーディーがその地位についた。彼はインドで二〇〇人のマーザンダラーン出身兵を徴募し、二個の百人隊を組織した。間もなく彼もまた君寵を失った。王は或るシュシュタル出身者をイラン人居留民の長としたが、この者は同胞の間に統制を保つことができなかつた。使節団滞在の当時は、ホラーサーン地方出身でイラン前宰相の一族ハージャーハサン・アリー 'Ali, Hasan 'Ali が長となり、宮廷に大臣の地位も得ていた(Dp. 94-103)。また、タイ各地に地方長官として派遣されたイラン人も少くなかつた。

付篇「アブルハサン Abu al-Hasan の事件とハイダラーバードの陥落」には、ムガール皇帝アウランゼブによるビジャプール(一六六六年)、ハイダラーバード(一六八七年)征服の顛末が記されている(Dp. 234-240)。

## 四

プラナライ王は、当時東南アジアに勢力を扶植しつつあったオランダ牽制のためにフランスを始めとする各国に使節を派遣したことで知られる。しかし著者はタイ、イラン兩國使節交換の目的と国書の内容については全く何も記さない。また、使節交換によって両国間の外交通商関係に進展を見たとはみなし難いが、外交関係樹立の背後にタイにおけるイラン人の商業活動があったことは興味深い。サファヴィー朝期に多数のホラーサーン出身者がムガル宮廷に仕え、またイスファハーン郊外新ジュルファ地区のアルメニア人商人がインド東南アジアで国際交易を営んだ事実はよく知られるのに反しインド以東のイラン人居留地の存在について知られていることは少いからである。

著者の東アジアに関する知識は、この旅行で自ら見聞した事物を除くと *Tahfat al-Charātib*, *Naf'is al-Funun* 等のコーラン注釈書、*'Ajātib al-Makhlūqat*, *Nuzhat al-Qulub* 等の十三、四世紀の地理書、十五世紀の年代記 *Rauzat as-Safa* 等に拠るものにはすぎない。彼の地理的世界観は旧幣でインドシナの地理を *Chm*, *Machm*, *Khita* 等の地名を用いて伝統的地理概念の枠内で理解し、中国と東南アジアの住民の由来をヤベテの子孫に求めようと試みている。

却ってそれだけに、著者がこの旅行で得た驚きも大きく、この記録がサファヴィー期の人士にもたらした知識も大であったであろう。十六世紀末ラーズビー *Amin Ahmad Razi* の記した *Hafz Iqim*<sup>(5)</sup> と比較すれば両者の知識の質と量の差は歴然としている。

次に、この旅行記では、チムール朝の遣明使節団の記録とは異って、単に事実のみを列記した報告書の体裁が採られず、しばしば著者個人の得た印象が率直に語られている。異教徒とその文化についてイブン・バトゥータが中国で示した如き嫌悪は示していない。ムスリムとしての限界は有するものの、新鮮で柔軟な驚きをもってイギリス人と東南アジア人の社会風俗を見ている。十七世紀イランの教養人が異った文明に接触して被った文化的衝撃の一例が見られるのである。

一九世紀の紀行文学は、サファヴィー朝期にこのような典範を有していたのであるが、両者の間の時代には、アフガン人のイスファハーン占領後アラビヤからインドの間の各地を遍歴した詩人ハズィーン *Shakh 'Alī Hazin* の回想録『ハズィーン史』*‘Tarikh-i-Hazin*』の二とを勝れた作品が生まれている。十一世紀のナースィル・ホスロー *Nāsir Khusraw* 十三世紀のサアディ *Sa'di Shirāzi* に続く散文紀行文学の伝統は絶えることがなかったのである。

英訳者オケインの注釈は、東南アジアの制度文物に関して

も、この旅行記の文学史的背景に関しても、また当時の政治的情況についても充分ではない。また訳文に付された前言はほとんどがペルシヤ語文学としての文体論に過ぎず、内容にかかわる解題は少い。

本書がアナタヤ朝史料としてどのような価値を有するかは、タイ史研究者の言を待たねばならぬが、十七世紀イラン人の国外移住、サファヴィー朝宮廷人の東アジアに関する知識、異った文化に接触した際の彼等の態度等を知る重要な資料であるのは明瞭であって、訳書刊行の意義も大であると認められる。(6)

### 註

(1) キリシヤ人ファルコン C. Phaulcon は、タイの宰相に登用される以前の二六七九年、スマトラ沖で難破したイランに向う使節団一行を救助して居る (W.A.R. Wood, *A History of Siam*, Bangkok, 1933, p. 199n 邦訳「那須喜一『タイ国史』一九四一年」)。

(2) メレディスマ・オーウェンスのカタログに Or. 6942, 159f, 20, 9×14.7 cm (G.M. Meredith-Owens, *Handlists of Persian manuscripts*, 1895-1966, London, 1968, p. 48) 参照。

(3) J.A. Boyle, *The Successor of Genghiz Khan*, New

York and London, 1971, p. 289 以下、フノルト、マールの地理書とイランの海上活動全般に関する概説書と and H. Cordier, *Cathey and the Way Thither*, vol. I, 1913, London, pp. 257-258)。

(4) 歴史時代のイラン人の海上活動全般に関する概説書とイスマ'il Ra'yan, *Daryadarvadi- Iranyan* (『イラン人の航海』) I-II, 1350, Tehran も大航海時代以降はイラン人のインド洋航行に同じく言及している。

(5) Amin Ahmad Razi, *Haft Iqlim*, bi-kushish Javad Fasil, Tehran, n.d., C.F. E. Berhels, "Amin Ahmad Razi", *Encyclopedia of Islam*, Old Ed.

(6) フノルギー Faruqi 教授がペルシヤ語テキスト刊行を準備中であつたところであるが紹介者は怠慢であつて、そのテキストが既に出版されたか否かを知らないことを末尾に書を添える。  
(*The Ship of Sulaiman*, Translated by John Okane pp. x+250, 25cm, London, 1972, Persian heritage series)